「銀河鉄道の夜」第四次稿の意義

――ジョバンニの父をめぐって――

杉岡ふみ

はじめに

『校本宮沢賢治全集』[注①]以後、「銀河鉄道の夜」といえば、第一次稿から第四次稿へという、三つの改稿の段階を持つ作品だということは、研究者の間では周知の事実である。しかし作品を読み、評価するにあたりどれを「銀河鉄道の夜」のテキストとするのかという問題については、依然として議論の余地が残る。本稿では、第三次稿と第四次稿をそれぞれ独立したテキストとして捉え、その二つのテキストにおいて、ジョバンニの父の像が異なっている点に着目した。ジョバンニの父の像が変化することにより、第四次稿はどんな意義を持つことになったのか。以下、二つのテキストを比較しながら、その意義について述べてみたい。

一、変化する子どもたちの関係

吉本隆明は「銀河鉄道の夜」におけるジョバンニの父が〈不在〉である点に着目し、「〈不在〉なのにこの父は作品のおもな登場人物の行動や、言葉や、こころのこまかい動きにつながる原動機」であると指摘する。[注②] その一方で吉本は、「作者はジョバンニの父とはなにか、焦点をむすぶように作品を織りあげていないし、そんな織り方をはじめから意図していない」と述べている。そして第三次稿から第四次稿への改稿は「〈不在〉の父の像から卑小な現実性をとりはらって、ぼんやりした輪郭のファンタジーとしての装飾をあたえ」るものだとしているが、果してそうか。たしかに、現存する「銀河鉄道の夜」草稿すべてにおいて、ジョバンニの父親が、直接姿を現している場面はない。したがって語り手による地の文や登場人物の科白による情報のみが、ジョバンニの父という存在を形作るのである。語り手や登場人物が、その姿なき存在について語るのはなぜか。それは登場人物たちが現在置かれている状況に、その存在が深く関わっているからである。第三次稿から第四次稿への改稿によって、〈不在〉であるジョバンニの父は、さらに大きな影響を他の登場人物たちに与える存在になっているのではないか。本稿では、語り手や登場人物がもたらす情報から、〈不在〉であるジョバンニの父が作品中で担う役割について、論じてみたい。

ジョバンニの父の像は、ジョバンニと、カムパネルラをはじめとする彼の級友たちとの関係にも、深く関わっている。第三次稿から第四次稿の、父の像の変化とは、ジョバンニとその級友たちとの関係の変化でもある。

まずジョバンニの父には第三次稿・第四次稿とも共通して、遠くの海へ漁に出ていて不在、さらに投獄されたために帰って来られないのだと噂されている、という設定がある。そのためジョバンニはザネリをはじめ、級友たちに「お父さんから、らっこの上着が来るよ。」とからかわれ、孤立している。

しかし第三次稿では父が「監獄に入ってゐる」こと自体は、息子であるジョバンニにも事実として受け止められている[注③]のに対し、第四次稿では投獄自体が単なる噂に過ぎないとしてジョバンニに否定されている。[注④] つまり第四次稿において投獄の情報は、誤りの可能性をジョバンニに信じさせる程度の不確かさを持っている。そのため、ジョバンニの日陰者意識

は、第四次稿よりも第三次稿の方が強く表れることになる。[注⑤]

そして最も大きく異なっているのは、第四次稿ではジョバンニの父はカムパネルラの父と幼なじみの友人で、今もその関係は続いているということだ。博士であるカムパネルラの父が、自分の父の友人であるという事実は、投獄という不名誉な噂をジョバンニが否定するための根拠にもなろう。また、父親同士が友人であるということから、第三次稿ではジョバンニの一方的な思慕[注⑥]に過ぎなかったカムパネルラとの関係が、第四次稿では息子であるジョバンニとカムパネルラも幼なじみという関係に変わっている。[注⑦]しかし第四次稿でも、学校や町といった現実世界の舞台で、ジョバンニとカムパネルラが直接言葉を交わす場面は出てこない。ジョバンニがカムパネルラと友人である事は、ジョバンニの独白や母との会話によって分かるのである。そして、その独白や会話の中には必ず、「お父さん」という言葉が出てくる。[注⑧]ジョバンニがカムパネルラとの友情を心的に確認しようとするとき、そこには必ず父親たちの姿がある。第四次稿においてジョバンニの父は、カムパネルラの父と友人である事によってジョバンニとカムパネルラの友情を生み出し、さらにそれを保証するための役割を担っているのである。

一方、ジョバンニに「悪口を云ふ」級友たちの中でも、とりわけザネリは目立つ存在である。ジョバンニが銀河鉄道に乗る前の、現実世界において名前を持って現れる級友は「ザネリ」と「カムパネルラ」だけである。第三次稿、また第四次稿においても、「ザネリ」は「決してひとの悪口などを云はない」カムパネルラとは対照的な存在として、登場している。しかし先述したように、ジョバンニの父の像が第四次稿で変化することに伴い、ジョバンニとカムパネルラの関係も変化している。そのことが〈ザネリ像〉にも変化をもたらしてはいないだろうか。

別役実はザネリを次のように解釈している。[注⑨]

彼にはまだ、不幸であることを通じて自分自身を固有のものとして確かめようとする衝動、もしくは感受性が芽生えて

いないから、ジョバンニの不幸には気付くことが出来ない。ジョバンニに対して残酷にふるまえるのは、そのためである。

つまりザネリをジョバンニやカムパネルラよりも幼い存在として解釈し、ザネリがジョバンニに「悪口」を言うのも、幼さ故の行動だとしている。しかし、ザネリはそんなにも幼い存在なのであろうか。とりわけ第四次稿のザネリは、ジョバンニという存在を強く意識し、自分の放つ言葉の残酷さも充分に理解しているのではないか。次に挙げるのは第三次稿のジョバンニとザネリがすれ違った時の場面である。

「ザネリ、どこへ行ったの。」ジョバンニがまださう云ってしまはないうちに、
「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるやうにうしろから叫びました。
ジョバンニは、ぱっと胸がつめたくなり、そこら中きぃんと鳴るやうに思ひました。
なぜならジョバンニのお父さんは、そんならっこや海豹をとる、それも密猟船に乗ってゐて、それになにかひとを怪我させたために、遠くのさびしい海峡の町の監獄に入ってゐるといふのでした。

この場面が、第四次稿では次のようになっている。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」（中略。以下「ジョバンニがまだ…思ひました。」まで第三次稿と同じ。）
「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向ふのひばの植った家の中へはひってゐました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのだらう。走るときはまるで鼠のやうなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかなからだ。」

第三、第四次稿ともにザネリはジョバンニの「うしろから」叫んでいる。第四次稿ではその後にジョバンニが叫び返す場面が加えられるのだが、「もうザネリは向ふのひばの植った家の中へはひって」いる。第四次稿のザネリは、すぐに逃げ込める場所が近くにあるからこそ、自分ひとりの時にもジョバンニに「悪口」を「投げつける」ことができたのではないか、と考えることができる。そうすると先の、ジョバンニの「うしろから」言葉を「投げつけるやうに」叫ぶという行動も、冷淡さ故ではなく、臆病から来た行動に思える。第四次稿では「走るときはまるで鼠のやうなくせに」というジョバンニの科白も加えられている。この科白からも、第四次稿では〈臆病なザネリ像〉を読み取ることが可能であると思う。ザネリは自分ひとりのときは距離を取りながらでないと、ジョバンニに「悪口」を言えない。言い換えるなら、本来臆病なザネリが、そうまでしても、ジョバンニに「悪口」を云わずにはいられなかった。その「悪口」とは、「お父さんから、らっこの上着が来るよ。」というものである。

第三次稿ではその悪口は、ジョバンニの父を侮蔑するものであると同時に、その父をかつて自慢にしていたジョバンニ[注10]を嘲る言葉でもある。しかし第四次稿では、ジョバンニとカムパネルラの関係の変化に伴い、そこにもうひとつの重要な意味が加わる。先に述べたように、ジョバンニとカムパネルラの友情は、彼等の父親同士の関係から生れたものである。

ジョバンニとカムパネルラにとって、父親が幼なじみの友人同士であるという事実は、一つの偶然である。だが〈偶然〉とは〈運命〉を感じさせるものでもある。ザネリは同じ学校の、同じクラスという〈偶然〉のもとにカムパネルラと出会っている。しかしそれはザネリだけに起きた〈偶然〉ではない。ザネリとカムパネルラの間にはなく、ジョバンニとカムパネルラの間には存在する、〈偶然〉という名の〈運命〉[注11]。ザネリはそれが妬ましいのではないか。ジョバンニは同級生とい

う輪の中から外れてもなお、カムパネルラと関係を持ち得るのである。ところがそのジョバンニの父が罪人となり、帰って来られなくなれば、博士であるカムパネルラの父との友情も危うくなる。父親同士の友情の揺らぎは、ジョバンニとカムパネルラの友情の、運命性をも揺がせる。まして、今のジョバンニにカムパネルラとの友情を保証するものは、父親同士の関係から生れた共通の思い出だけなのである。ザネリは何よりも、父親たちの友情の揺らぎをジョバンニに意識させたかったのではないか。それはすなわちジョバンニとカムパネルラの友情の危機を示すものでもあるからだ。カムパネルラは皆の憧れの対象となるような存在である。ザネリが、第三次稿の冒頭のジョバンニのように、カムパネルラと二人きりの友情を夢見ていたとしても不思議ではない。銀河鉄道の車中でジョバンニが、かほるという少女に嫉妬したように、ザネリもジョバンニに嫉妬していたのだと考えると、ザネリは幼さ故の残酷さを持つだけの存在ではない。

父の投獄にまつわる情報の曖昧さによって、第四次稿のジョバンニは第三次稿の彼ほど日陰者意識が強くない。そのためザネリたちとの関係も、対等な少年たちのそれとして考えやすくなっている。したがって〈ザネリ像〉も類型的にではなく、より多様な読みが可能になる。

このようにして見てみると、町かどでジョバンニが級友たちとすれ違う場面でのザネリの行動も興味深いものとなってくる。

「川へ行くの。」ジョバンニが云はうとして、少しのどがつまったやうに思ったとき、

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニはまっ赤になって、もう歩いてゐるかもわからず、急いで行きすぎようとしましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒さうに、だまって少しわらって、怒らないだらうかといふやうにジョバンニの方を見てゐました。

ジョバンニは、遁げるやうにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行って間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかへって見ましたら、ザネリがやはりふりかへって見てゐました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向ふにぼんやり見える橋の方へ歩いて行ってしまったのでした。ジョバンニは、なんとも云へずさびしくなって、いきなり走り出しました。

この場面は、第四次稿で「向ふにぼんやり見える橋の方へ歩いて」という一節が加えられる以外は、第三次稿からの変化がない箇所であるが、ジョバンニの父親像の変化によって、多様な読みを誘う場面になっている。カムパネルラは振り返っていなかったのに、ザネリは振り返って見ていた。これはザネリが自分の言葉の残酷さを意識していることの表れではないか。ザネリ以外に「らっこの上着が来るよ」と叫んだ級友たちにとって、それは単なる囃し言葉に過ぎないから、通り過ぎていったジョバンニがどんな様子をしているかなど彼らは気にならない。けれどザネリは意識的にその残酷な言葉を用いている。しかもその時、近くにはカムパネルラもいた。カムパネルラの反応を、ザネリはジョバンニと同じぐらいに意識して見ていたかもしれない。そのカムパネルラの反応に対して、ジョバンニがどんな様子をするか、ザネリは気になった。だからジョバンニを振り返って見ていた。そしてジョバンニは「みんな」の中にカムパネルラがいたからこそ振り返って見たりしたのだろう。「らっこの上着が来る」という言葉に、ジョバンニとザネリだけが同じ意味（ジョバンニとカムパネルラの運命的な友情の揺らぎ）を見出しているから、二人は同じように「ふりかへって見」るという行動をとっているのである。

父の像の変化によって生じたカムパネルラとジョバンニの友情は、単なる〈いじめっ子〉と見なされがちな〈ザネリ像〉にも、またジョバンニとザネリの関係にも、より複雑な表情を与えているといえる。

二、第三次稿のブルカニロ博士

ここまで二つのテキストを比べ、ジョバンニの父親像の相違から、ジョバンニとカムパネルラの関係も変化していることを述べてきた。やがて二人は関係の変化に関わらず、銀河鉄道の車中で別離を迎える。

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ。」カムパネルラが少しそっちを避けるやうにしながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそっちを見てまるでぎくっとしてしまひました。天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどほんとあいてゐるのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすってのぞいてもなんにも見えずたゞ眼がしんしんと痛むのでした。ジョバンニが云ひました。

「僕もうあんな大きな暗の中だってこはくない。きっとみんなのほんたうのさいはひをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行かう。」（中略）

「カムパネルラ、僕たち一緒に行かうねえ。」ジョバンニが斯う云ひながらふりかへって見ましたらそのいままでカムパネルラの座ってゐた席にもうカムパネルラの形は見えずたゞ黒いびろうどばかりひかってゐました。ジョバンニはまるで鉄砲丸のやうに立ちあがりました。そして誰にも聞えないやうに窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになったやうに思ひました。

この場面は第三次稿から改稿のない箇所である。ただ、大きく違っていることは、第三次稿はこの場面のすぐ後にブル

カニロ博士が登場するということである。なぜ作者は、一度はブルカニロ博士というジョバンニを導く存在を用意しておきながら、第四次稿でそれを消してしまったのだろう。そのかわりに第四次稿ではカムパネルラの父を登場させ、ジョバンニの父の帰還の報せを、ジョバンニに伝えるという場面を設定している。

第三次稿におけるブルカニロ博士、第四次稿におけるカムパネルラとジョバンニの父の役割を考えることは、第三次稿と第四次稿のラストを比べつつ、そこに隠された作者の改稿の意図を探ることにもつながってくる。二つのラストについて、天沢退二郎・入沢康夫は次のように述べている。[注12] 以下、天沢が第四次稿のラストについて述べているところから引用する。

天沢　ここでようやく、ジョバンニの父は監獄に入っていないだけでなく、もうすぐ帰るということまでがはっきりする。暗い思いのほとんどは、このことによって無くなるし、カムパネルラと一緒に遊べる物質的な条件もとととのうわけだけれど、その時にはすでにカムパネルラはいない。しかし、このようなジョバンニの明日からの明るい変化と、これを書いていたころの賢治という人間がおそらく持っていただろう展望とは、まったく裏腹なわけです。ということは、逆説的に言えば、ジョバンニという主人公は、この作品の書き出しのところと同じような暗い展望しか持たない作者・宮沢賢治によって、ある意味で見捨てられるわけだ。幸せな日常の側へ「まあ、幸せにおやりよ」と追い返されてしまう。

（中略）

入沢　ブルカニロ登場の方を生かした場合には、なおジョバンニは見捨てられたままである。父が帰ってくるかどうかもわからない。万人の幸せを求めて頑張らなければならない。それは非常に苦しいことです。また、牛乳ももらえるかどうかわからない。一方、後の方で終れば牛乳はあるし父親は帰ってくる。

つまり、第三次稿のラストの方がジョバンニにとって苦しいものであるとし、第四次稿をいわば〈ハッピーエンド〉だと解釈している。また、中野新治は第三次稿のジョバンニを「あの『グスコーブドリの伝記』の主人公のように、他者のために生きる困難な道に踏み出して行くことは十分に推測できる。[注⑬]」とし、第四次稿のジョバンニについては、次のように述べている。

そこにいるのは「みんなのために生きようとするジョバンニ」であるよりも、辛い経験を乗りこえて安らいでいるジョバンニ」であるという印象をぬぐうことができないのである。（中略）カムパネルラの父からそれを聞いて喜こび勇んで家に走るジョバンニの姿に明らかなように、父親が帰って来ることはそのまま、物語の最初で語られた彼の苦しみが消失することを意味する。つまり、ジョバンニはこの旅によって「成長」せずとも、これからは町の中でしっかりと自分の居場所を確保できるのだ。それは父親とは無関係に新しい歩みを始めるであろう初期形のジョバンニとは大きくへだたっている。

これらの先行研究に対し、まず疑問に思うのは、第三次稿のラストが、第四次稿のラストよりも苦しいものだと見なされていることの妥当性についてである。ジョバンニはブルカニロ博士から「これから何でもいつでも私のとこへ相談においでなさい。」という言葉と、「大きな二枚の金貨」をもらう。ジョバンニは夢から醒めても、自分を見守り、応援してくれる存在（しかも博士という知識階級の）を手に入れたのだ。これは世間の目を考えればむしろ、投獄された父が戻ってくるよりも明るい結末と言えるのではないだろうか。また金貨があれば、ジョバンニが冒頭の章で考えていたように「コンデンスミルク」も買える。入沢康夫が述べるほど、第四次稿以上に「非常に苦しい」結末だとは思えない。

この他にも疑問に感じる点は二つある。まず一つは、ブルカニロ博士の存在とその言葉は、ジョバンニを「万人の幸せを求めて頑張ら」せるためだけの効果しか持っていないのかということ。そしてもう一つは、父の帰還は疑いの余地も無いほどに確実なものなのかということである。まずは、第三次稿のブルカニロ博士について考えてみよう。

第三次稿のブルカニロ博士は幻想世界の中で度々、「セロのやうな声」でジョバンニを導く。そしてカムパネルラとの別離の直後に、ジョバンニの前に姿を現す。まず彼は泣いているジョバンニに「やさしいセロのやうな声」で、「おまへはいったい何を泣いてゐるの。ちょっとこっちをごらん。」と語りかける。カムパネルラの姿を見失い、絶望的なジョバンニには、こんな優しい声だけでも慰めになるであろう。そして次のようにジョバンニを進む道を提示する。

「おまへはさっき考へたやうにあらゆるひとのいちばんの幸福をさがしみんなと一しょに早くそこに行くがいゝ、そこでばかりおまへはほんたうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ。」

そして現実世界に帰ってきたジョバンニは「僕きっとまっすぐに進みます。きっとほんたうの幸福を求めます。」と、ブルカニロ博士に「力強く云」う。この時のジョバンニの決意の言葉が、先にあげた先行研究のような解釈をもたらしているのであろう。しかし、この決意によりジョバンニはカムパネルラを失った悲しみからは目を逸らすことができるのではないか。目を逸らす、という言葉は正しくないであろうか。だが、ブルカニロ博士の「あらゆるひとのいちばんの幸福をさがしみんなと一しょに早くそこに行くがいゝ」という言葉の中の「みんな」とはどんな人々を指すのであろう。

ジョバンニは、「きっとみんなのほんたうのさいはいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行かう。」とカムパネルラに言った。そしてカムパネルラも、「あゝきっと行くよ。」と言った。ところが彼は、ジョバンニには見えない「みんな集まっている」「ほんたうの天上」を見つけ、ジョバンニの前から姿を消してしまう。ジョバンニが

「みんな」ではなくカムパネルラというたったひとりの人と一緒に行こうとしたからいけないのだ、ブルカニロ博士はそのことを教えたのだという解釈は可能である。しかしジョバンニは、「みんなのほんたうのさいはひをさがしに行く」旅の道連れとしてカムパネルラを欲していたのだ。一方、ブルカニロ博士が言っているのは、まず「あらゆるひとのいちばんの幸福をさがし」出して、それからそこに「みんな」を導けということなのではないのか。つまりジョバンニは、「みんなのほんたうのさいはひをさがしに行く」旅には独りで出なくてはならない。石炭袋の「あんな大きな暗の中」でも、たった独りで進まなければならないのかもしれないのだ。その恐ろしさを、果してこの時のジョバンニは意識しているのだろうか。第三次稿のブルカニロ博士は第二次稿、第一次稿とくらべても饒舌である。その饒舌なブルカニロ博士に対しジョバンニは、かつて漂流者の青年にしたような反駁も見せなければ、疑問を投げかけるということすらも、ほとんどしてない。ブルカニロ博士の言葉を、実に素直に受け入れている。

ブルカニロ博士には、ジョバンニに〈選ばれた者〉という意識と、それにふさわしい〈使命〉を与える役割があるのではないか。それが顕著なのは次の場面であろう。ブルカニロ博士がジョバンニに「おまへはあのプレシオスの鎖を解かなければならない。」と言った直後の場面である。

そのときまっくらな地平線の向ふから青じろいのろしがまるでひるまのやうにうちあげられ汽車の中はすっかり明るくなりました。そしてのろしは高くそらにかゝって光りつゞけました。

「あゝマジェランの星雲だ。さあもうきっと僕は僕のために、僕のお母さんのために、カムパネルラのためにみんなのためにほんたうのほんたうの幸福をさがすぞ。」ジョバンニは唇を噛んでそのマジェランの星雲をのぞんで立ちました。そのいちばん幸福なそのひとのために！

「さあ、切符をしっかり持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股に

まっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川のなかでたった一つのほんたうのその切符を決しておまへはなくしていけない。」

ジョバンニを祝福するかのように空高く光るのろし、ジョバンニだけが持っている切符。ここでジョバンニは特別な、〈選ばれた者〉となることができる。特に第三次稿のジョバンニは、第四次稿のジョバンニに比べて日陰者意識が強い。日陰者意識というのは、自分の異常性を感じるところから生れるものでもあろうが、ここでのジョバンニは、今まで感じていた自らの異常性すらも、実は〈選ばれた者〉が持つ特別性であったのだと認識することができる。その恍惚の中で、ジョバンニが先ほど味わった石炭袋の闇の深さ、カムパネルラとの別れのつらさは、希薄なものになっていくのである。

けれども、大抵の少年はいつかは気付く。自分は〈選ばれた者〉などではなく、自分のために用意された崇高な〈使命〉などないということに。その時、再び襲ってきた石炭袋の闇や、孤独の恐ろしさは、いっそう正視しがたいものとなるのである。

作者・宮沢賢治は死の十日前、教え子に宛てた書簡[注⑭]の中で、次のように語っている。

私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過って身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについたものでもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しみ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かが空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従って師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。（中略）どうか今のご生活を大切にお護り下さい。上のそらでなしに、しっかり

落ちついて、一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならないものは苦しんで生きて行きませう。

ジョバンニの決意に嘘はなかったであろう。ただし、それは「一時の感激や興奮」でもある。ジョバンニもいつか自分の築いてきたものは「蜃気楼」だと感じる時が来るかもしれない。作者がブルカニロ博士の登場を削ったのは、そんな自分自身への戒めでもあったのだろうか。そこで再び第四次稿に戻り、ジョバンニの父について考えてみることにしよう。

三、第四次稿の父親たち

そもそも、第四次稿においても、ジョバンニの父の帰還は疑いの余地がない程に確実なものなのであろうか。次にあげるラストの場面で、ジョバンニは父の帰還の知らせを、博士（カムパネルラの父・ブルカニロとは別人物）から受けるのである。

「あなたのお父さんはもう帰ってゐますか。」博士は堅く時計を握ったまゝ、またきゝました。

「いゝえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ、ぼくには一昨日大へん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

さう云ひながら博士はまた川下の銀河のいっぱいにうつった方へじっと眼を送りました。

ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云へずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を

持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思ふともう一目散に河原を街の方へ走りました。

竹腰幸夫はこれを「あの場面でやや唐突であるのは否めまい。」と評しながらも次のように述べている。[注⑮]

父が親友の博士に連絡したのは分かる。しかし彼は、なぜ最も心配している家族にも手紙を書かなかったのだろう。（中略）「一昨日」の便りで、船が遅れなければ「もう帰って」いるという。その時間的な順序はどうなっているのだろう……。こうした唐突さを冒してまで、賢治はジョバンニの父を帰還させているのである。（中略）この「胸がいっぱいでなんにも云え」ないところや父帰還の知らせに「もう一目散に」走りだすところは、これこそ子供の姿、真相であろうと思われる。友人の死を悲しい辛いと思うのも子供の真相ならば、その同じ瞬間に父の帰還に胸踊るのもそうなのである。

そして父の帰還を、「醜悪な現実」や「恐怖の根源」に気付いた「子供（読者）」とジョバンニに対する「賢治の癒しの配慮」であると結論付けている。つまり竹腰幸夫は、カムパネルラとの別離も、石炭袋の恐ろしさも、父の帰還で癒すことができると考えているようである。しかしそれならば、作者はもっと明確な父の帰還、つまり父の姿そのものを、ラストで描くべきだったのではないだろうか。そもそも、カムパネルラの父の口からそれが伝えられることが不自然なのだ。他にもっと自然な父の帰還の描き方が考えられるのではないか。例えば、カムパネルラの父と別れ、家へと急ぐジョバンニの向うから父の姿が現れるというのはどうか。いずれにせよ、それはさほど難しいことだと思われない。作者がそのような描き方をしていないことに、何らかの意図を見出すべきではないか。

ここに、今まであげてきた先行研究とは異なる私の読みを述べようと思う。「銀河鉄道の夜」初読の時、私はジョバン

ニの父は帰って来ないものだと思い込んでいた。おそらくそれは、私の、早くに父を亡くしていたという個人的な事情のせいであったのだろう。当時の私は、博士の「どうしたのかなあ」という言葉が伝える事態の異常性を過敏に受け止め、ジョバンニの父はもう帰って来ないのだと判断した。したがって、街の方へ走りだすジョバンニの様子を、「喜こび勇んで」（中野新治）いる姿、「胸踊る」（竹腰幸夫）姿とは思わなかった。私の胸に浮んでいたのは、「何とも云へ」ないかなしみを胸に抱きながら、「牛乳」と〈父帰還のニュース〉を、「お母さん」のために運ぼうとするジョバンニの姿だけである。だが幼い私は、ジョバンニの父が帰還しない可能性に「癒し」を見出していたとさえ言えるだろう。ジョバンニが自分と近い不幸を抱え続けることで、ジョバンニは私の分身たりえ、「銀河鉄道の夜」は私という一読者にとって、単なるファンタジー以上の意味を持つものになりえたのだから。

そういった、私にとってはごく自然な読みが、むしろ特殊なものであると知ったのは、このような研究という姿勢を取り始めてからだが、私は過去の自らの読みを誤っているとは思わない。こんな読みも許すために、作者は敢えてジョバンニの父の帰還を曖昧さの残るものに留めておいたのではないか。

作者・宮沢賢治が母木光に宛てた書簡[注16]には次のような部分がある。これは母木の書いた童話「ワラシと風魔」に対する、賢治の批評の一部分である。

> たゞ、作の構造としてははじめの父の行衛不明が、それが全く不明になったと断わってあるにも係はらず、どうも童話としては何かの期待を終りまで持ち越し、それがたうとう解決されないといふ気分を齎さないかと思ひます。この点こどもらに読んで聞かせてあとでそっと質問して試してごらんになれば、答はたぶんまちまちだらうと思ひます。

米田利昭はこの部分を取り上げ、次のように述べている。[注17]

「銀河鉄道の夜」の最終形で、ジョバンニの父がはっきり帰ってくることになったのは、賢治自身がこういう自分の批評に忠実に従ったためだろうか。わたしは、ジョバンニの父は帰るとも帰らないともわからない初期形の方が、渾沌とした現実の暗示のようで、童話的に解決した最終形よりもずっといいと思っている。

米田も第四次稿（最終形）のラストの父の帰還は確実なものであると解釈しているようだ。しかし、いくら父の親友とはいえ、他人であるカムパネルラの父（しかも息子を失ったばかりの）からその知らせが告げられるという不自然さ、父の姿そのものが現れるわけではないという曖昧さを考えてみてほしい。作者はジョバンニの父の行方不明に、「こどもら」の「たぶんまちまち」な「答」をどれも生かすような、「解決」を与えたかったのではないだろうか。父はもうすぐ帰ってくるという「答」に希望を見出すことも、私のような逆の「答」に救いを求めることも、いずれの読み方も作者は許しているのではないか。

一方、同じ作者の作であるのに、「グスコーブドリの伝記」には行方をくらました主人公の父と母は、森の中で息絶えていたという「解決」が明確に書かれている。そして成人した主人公は両親の墓を作る。これには次のような理由が考えられるだろう。この物語の主人公は最後に自らの命を犠牲にして人々を飢饉から救う。ここで両親が生きていれば、今は自分が護るべき存在を、息子である主人公が見捨ててしまうことになる。いわば心残りを主人公に持たせないためと、もうひとつ、飢饉の悲惨さを描くためである。両親が死んだのは子に食糧を残すために、自らを犠牲にして口減らしした結果である。それが主人公の最後の行動を決めた動機にもなっていると考えられる。したがって、両親の行方不明の結果を明確に書くことは、作品を構成する上で必然性を持っているのである。

「銀河鉄道の夜」における、ジョバンニの父の帰還という設定には、作品構成上の必然性があるのだろうか。父が帰っ

てくればジョバンニに明るい未来が約束されるであろうというようなことは、ジョバンニのその後が作品に書かれていない以上、必然だとは言えないであろう。もちろん、父が帰ってきてはいけないという必然性もない。つまり、作品の構成上では、ジョバンニの父は帰ってきても、帰ってこなくてもどちらでもいいのである。だから作者は読者のために、父の行方不明の「解決」を曖昧なものにすることができたのだ。

ジョバンニの父は、むしろジョバンニの悲劇を生み出す役割を担っている。ジョバンニの父は必ず帰ってくると理解した研究者たちが、それによってジョバンニの苦しみのほとんどは解消されると述べていることが、逆にそれを裏付けている。しかし私は前に、ジョバンニの父はジョバンニとカムパネルラの友情を保証するための存在でもあると述べておいた。カムパネルラ亡き今、友情が存在していたという保証など、実際的な意味を持たないかもしれないが、実はそれは父の姿はなくとも保証されたのである。ジョバンニの父はカムパネルラの父に手紙を出していた。父親同士の友情は確かに続いていたのである。そしてその内容はカムパネルラの父からジョバンニに伝えられる。この奇妙な手続きも、ジョバンニとカムパネルラの特別な友情が、確かに存在していたことの証明にはなるのだ。

以上、述べてきたことから考え、第四次稿のラストが第三次稿に比べて安直な結末であるとは思わない。崇高に思われる「使命」を主人公に自覚させ、それに突き進めという第三次稿の結末の方がむしろ安直であるように思われるのだ。

父の像の変化により、現実世界でもカムパネルラとの友情を手に入れていたジョバンニ。〈使命〉を与えるブルカニロ博士の消失。第四次稿では、石炭袋の闇や、ジョバンニの孤独といった問題が、純化されクローズアップされることになるだろう。

注

※テキストの引用は、ちくま文庫版『宮沢賢治全集　7』（筑摩書房／一九八五年十二月）に拠る。ただしルビは省略した。書簡の引用は同全集の九巻（一九九五年三月）に拠る。

① 『校本宮沢賢治全集』筑摩書房／一九七四年
② 『宮沢賢治』吉本隆明／筑摩書房／一九八九年七月
③ ジョバンニの独白「ぼくのお父さんは、わるくて監獄にはひってゐるのではない。」
④ ジョバンニが母に言う科白「お父さんが監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がないんだ。」
⑤ それを端的に表すのが、第三次稿でのジョバンニの独白「ぼくはみんなから、まるで狐のやうに見えるんだ。」
⑥ ジョバンニの独白「ぼくがカムパネルラと友だちだったら、どんなにいゝだらう。」
⑦ 母がジョバンニに言う科白「あの人はうちのお父さんとはちゃうどおまへたちのやうに小さいときからのお友達だったさうだよ。」
⑧ 学校の先生の質問に、カムパネルラと共に答えられなかった時のジョバンニの独白「さうだ僕は知ってゐたのだ。勿論カムパネルラも知ってゐる、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎から巨きな本をもってきて、ぎんがといふところをひろげ、まっ黒な頁いっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、（中略）気の毒がってわざと返事をしなかったのだ」　加えて、注⑦の母の言葉に答えたジョバンニの科白「あゝだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールラムプで走る汽車があったんだ。」（傍線筆者）これらの語りの中に、ジョバンニとカムパネルラの銀河鉄道旅行の伏線ともなるような言葉（「ぎんが」「汽車」など）が含まれている点も、「銀河鉄道の夜」における父の存在の重要性を示しているといえる。
⑨ 『宮沢賢治・第七号』収録「ジョバンニとカムパネルラ」別役実／洋々社／一九八七年十一月
⑩ 第三次稿ではジョバンニの独白「去年の夏、帰って来たときだって、ちょっと見たときはびっくりしたけれども、ほんたうはにこにこわらって、それにあの荷物を解いたときならどうだ、鮭の皮でこさへた大きな靴だの、となかいの角だの、どんなにぼくは、よろこんではねあがって叫んだかしれない。ぼくは学校へ持って行ってみんなに見せた。先生までめづらしいといって見たんだ。いまだってちゃんと標本室にある。」・第四次稿でそれに対応するところはジョバンニの母への科白「この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室へ持って行くよ。」である。同じように父を誇りにしていると語る場面であるが、第三次稿ではジョバンニの眼に映る父

の姿が、「ちょっと見たときはびっくり」するようなものである。第三次稿のジョバンニは海から帰ってきた父の姿に軽い違和と畏怖を覚えている。投獄の理由も密猟だけではなく「ひとを怪我させたため」とある。第三次稿のジョバンニの父は粗野なイメージを持つ漁師である。一方、第四次稿でジョバンニの父は同じ漁師でありながらも、持ち帰ったものを標本として自ら「学校へ寄贈」したり、博士であるカムパネルラの父と交友関係を保ち続けているなど、知的な面をのぞかせている。

⑪ 第四次稿で、ジョバンニが銀河鉄道の車中で初めてカムパネルラの存在に気付いたとき、カムパネルラは「みんなはねずゐぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずゐぶん走ったけれども追ひつかなかった。」と語る。ジョバンニが「どこかで待ってゐようか。」と言うと、カムパネルラは「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎ひにきたんだ。」と答える。カムパネルラがとりわけザネリの名前を出すのは、彼がザネリを救って溺死したことを暗に物語っているためと読めるが、ジョバンニ、カムパネルラ、ザネリという三人の関係も、ここから読み取れる。ジョバンニたちが銀河鉄道に乗る直前の現実世界では、ジョバンニよりもザネリが、カムパネルラと近い位置にいる。しかしザネリは銀河鉄道が走る「幻想第四次」という内的な世界までは、カムパネルラを「追ひ」かけては行けない存在である。内的な世界までカムパネルラを追いかけて行けるのはジョバンニだけである。なぜなら銀河鉄道が走る幻想世界は、ジョバンニとカムパネルラの共通の思い出（注⑧参照）から生れているとも言えるからだ。ザネリは「ずゐぶん走っ」てもカムパネルラに「追ひ」つけない上に、「お父さんが迎ひに」来てしまう。ジョバンニの父が、ジョバンニとカムパネルラを結び付けるのとは逆に、ザネリの「お父さん」はザネリとカムパネルラを引き離してしまうのである。ザネリは〈偶然〉川に落ち、それを助けたカムパネルラが〈偶然〉死んでしまうことにより、はじめてその友情を〈運命〉的なものにすることができたといえる。

⑫ 『新装改訂版・討議「銀河鉄道の夜」とは何か』天沢退二郎・入沢康夫／青土社／一九七九年十二月

⑬ 『宮沢賢治・童話の読解』中野新治／翰林書房／一九九三年五月

⑭ 一九三三年九月十一日、柳原昌悦あて。なお「銀河鉄道の夜」第四次稿の成立時期は明確ではないが、遺された創作メモから推察して一九三一年秋以降と考えられる。（『國文學』収録『「銀河鉄道の夜」の成立』杉浦静／學燈社／一九九四年四月）

⑮ 『宮沢賢治 Annual 第七号』収録「宮沢賢治・二相系モデルとしての『銀河鉄道の夜』」竹腰幸夫／宮沢賢治学会イーハトーブセンター／一九九七年三月

⑯ 一九三二年六月二十一日。

⑰ 『宮沢賢治の手紙』米田利昭／大修館書店／一九九五年七月